［第三話］

上杉鷹山

上杉鷹山は、ケネディ大統領が最も尊敬した日本の政治家として知られています。鷹山の米沢藩行財政改革は、苦難の連続でした。愛と信頼の政治と申しますが、厳正と勇断をも備えた指導者の典型であります。寛容と厳格と、よろしきを得ることが、リーダーにとっていかに大切かを痛感させられます。

川中島の戦いで有名な謙信を初代とする上杉家は、所領三百万石といわれましたが、いろんな事情から、九代重定のころには米沢十五万石と小さくなって、藩の財政は極度に悪化していました。そこへ親戚すじの九州高鍋藩から、むこ養子に入ったのが、十歳の少年鷹山です。

妻となった上杉家の幸姫は、五歳の知能・十歳の身体という障害児でした。鷹山はこの童女のような妻を限りなくいたわり、その愛情を藩の領民たちにも注い

でいきます。

やがて養父重定は隠居、鷹山は十七歳で藩主の座につくのですが、そのとき詠んだ歌があります。

「受けつぎて　国の司の　身となれば　忘るまじきは　民の父母」

藩主となったからには、領民たちの父であり母であることを忘れずに、仁愛の政治を心がけていこう――というのです。

藩の行財政改革にあたっては、三本の大きな柱を立てました。

一、出ずるを制する（大倹約令）

二、入るをはかる（産業振興）

三、人づくり（人材育成）

鷹山は、柔軟な思考力・果断な実行力をもって、武士たち・領民たちの先頭に立ち、みずから手本を示します。鷹山の人間性の根底には、愛――いたわりと思いやりがありました。藩立て直しの大事業は、旧来の考えに固執する重臣たち

をはじめとするさまざまな抵抗や、苦難を乗り越え、いくたびも挫折しながら、三十余年の歳月をかけて、ようやく成果をあげたのでした。

正室である幸姫は、幼い心身のまま三十歳ではかない一生をとじます。家臣の強い願いとすすめで、お豊の方という側室をむかえていましたが、その間に生まれた二人の男子も早く死に、家庭的には決して幸せではなかった鷹山です。

実の父の看病三十日、義父の看病八十日、みずから手をつくしました。さらには病弱だった養子の治広も中風にかかり、その最期までみとる運命にあった人でした。公私ともに働きどおしです。

三十八年間、自分を支えてくれたお豊の方が亡くなると、さすがの鷹山も気力急におとろえ、一か月ほど病床につき、逝去いたします。疲労と老衰によるといわれています。

鷹山生涯の信条歌として、

「なせばなる　なさねばならぬ　何事も　ならぬは人の　なさぬなりけり」

が一般に知られています。また鷹山はその忙しい身でありながら、終身学問求道につとめ、自身で筆記した本が四百四十六冊もあり、大名でこれだけ多くの手写本を残している例はないとのことです。

文政五年（一八二二）七十二歳没

○　米沢藩の行財政改革は、現在の企業の運営にそのままあてはまる。
支出を抑えて収入を計る、そして人材育成。タニサケのお手本です。

○　「愛と信頼と厳正と勇断」……真のリーダーの姿。
リーダーの器量の大きさで企業の将来が決まると感じました。

（M生）